中国人日本語学習者の習得しにくいテンスとアスペクトの用法とその要因に関する考察

杜　逸丹

要旨

本研究の目的は、日本人と中国人のより良いコミュニケーションのための教育に資するために、中国人日本語学習者のテンスとアスペクトに関する習得状況の調査とその誤用分析、および日本語教科書分析をもとに、習得しにくい用法と要因を明らかにすることである。

本研究では、中国の大連外国語大学の学生を対象に習得調査を実施した。結果の分析から、母語の影響による誤用も確認されたが、教科書での取り扱い方が日本語学習者の習得に強く影響していることを明らかにした。すなわち、教科書でまったく取り上げられていない用法や、簡単な説明だけで取り上げ方が不十分な用法は、学習者にとって習得しにくい用法となっていた。テンスやアスペクトのように様々な用法があり、かつ使い分けが難しい用法等については、詳細に説明することが日本語学習に役立つと考えられる。教科書では、その特殊な用法をすべて盛り込むことは現実的ではないので、自学用の副教材等の作成が有効な方法の一つとなると指摘した。

1　研究の背景と目的

世界における日本語学習者数は増加し続けている。2012 年度の国際交流基金調査の「海外における日本語教育の現状」によると、最も学習者が多い国は中国である。日本への留学者や日系企業への就職者は増加傾向にある。また、日中間の貿易の発展に伴って、両国の経済的なつながりは益々深くなっているし、日本文化の広まりによって、中国人の日本に対する興味も高まっている。このような状況を背景に、中国人日本語学習者は 100 万人を突破して、世界一位となり、中国における日本語教育の重要性がより高まっていることが分かる。しかし、中国の日本語教育の現場では、相変わらず教材や教授法情報の不足などの問題が存在している。

ところで、中国人学習者にとって、日本語文法の習得は難しいと意識され、様々な誤用が現れる。よく見られるものの一つとして、テンスとアスペクトの誤用がある。中国語は文法形式としてのテンスとアスペクトを持たない言語であり、日本語の述語の「ル形」と「タ形」という文法的な対立の表現に対応する中国語の表現は存在しないと言われていること[(1)]が関わっているだろう。そこで、中国人日本語学習者が日本語を学習する時、テンスとアス

ペクトの基本的な用法を習得しても、実際の運用、例えば、レポートや論文の作成、日本人とのコミュニケーションにおいて誤用は少なくなく、問題となる恐れがある。そのような誤用例の一つとして、「日本に来た前に、日本文化に関する本をたくさん読みました」といった文を挙げることができる。学習者の考えでは、前件の「日本に来た」ということも後件の「本をたくさん読んだ」ということも発話時よりも過去に発生したことなので、単純に前件も後件も過去を表す「タ形」を使ってしまうのである。コミュニケーションの際、このような文は相手に理解してはもらえるだろうが、文法的に正しい日本語とは言えない。そこで、より正確な日本語を使用することができるような教育方法の改善に活かすために、中国人日本語学習者のテンスとアスペクトの調査と教科書分析をもとに、習得しにくい用法とその誤用の要因を明らかにすることが、本研究の目的である。なお、本研究では、日本語のテンスとアスペクトの用法については、寺村（1984）、益岡・田窪（1992）の用語に従う。

2　中国で用いられている日本語教科書分析

中国の大学の日本語専攻の学部や学科では、北部は『新大学日本語』（大連外国語大学日本語学院編、大連理工大学出版社発行）が、南部は『新編日本語』（周平・陳小芬編、上海外語教育出版社発行）が代表的なテキストとして幅広く使われている。そこで、本研究で習得調査を行った大連外国語大学で用いられている『新大学日本語』を分析の対象とした。『新大学日本語』は、全四冊で、テンス・アスペクトに関する学習項目は第一冊で取り上げられている。

日本語学習の早い段階において、学習者は日本語の文法をあまり習得していない。そのため、『新大学日本語』の第一冊の総合篇第3課では、状態動詞「ある」「いる」が導入されるが、様々な例と練習問題を通して存在文の説明をすることのみに焦点を当て、動詞そのものの機能に関わることをすべて省略するという、限定的な用法説明のテキストとなっている。

テンスに関わる用法としては、第一冊の総合篇第5課において動詞のル形が取り上げられている。第5課では、ル形の例文が多く挙げられているが、そのほとんどが未来を表すル形、または現在の習慣を表すものである。しかも、注目している点は動詞が自動詞か他動詞かであり、動詞の自他の違いによるル形の使い方を説明するものとなっている。動詞のル形が、現在の状態、現在の習慣、未来を表すことなど、テンスに関わる具体的な内容には一言も言及していない。

動詞のタ形は第一冊の総合篇第6課で取り上げられ、動詞の過去形は動作・作用が完了したことや過去に起こったことを表すと説明している。文型の「Vました」は「動詞敬体の過去形式であり、動作がすでに完了したことを表す」[(2)] と解説している。この課を通して、学習者は動詞のタ形の基本的な用法を習得すると考えられる。しかし、解説の部分では「完了」と「過去」の両方に言及しているが、簡単な一文で説明するにとどまっており、詳し

い説明はない。また、挙げられている例文や練習の部分はすべてタ形が過去を表すものであり、完了に関する例は挙げられていない。

動詞のテイル形の用法は第一冊の総合篇第10課で取り上げられている。その用法について、「動作、作用が進行中であることを表す」、「動作、作用の結果を表す」、「単純な状態を表す」、「過去の経歴を表す」、「動作の反復進行を表す」という五つの種類に分けて様々な例を挙げ、箇条書きで説明している。その中で、「動作、作用が進行中であることを表す」、「動作、作用の結果を表す」という用法において、述語の動詞についてはそれぞれ「持続の意味を含む動詞」「動作の結果が持続の意味を含む動詞」と説明している。学習者は教科書のこのような簡単な説明によりテイル形の基本的な使い方は習得できると考えられるが、この説明の仕方では不十分なところもある。例えば、「持続の意味を含む動詞」、「動作の結果が持続の意味を含む動詞」という説明は理解しにくく、単に「継続動詞」と「瞬間動詞」と表記した方がむしろ理解しやすいと思われる。また、教科書では基本的な用法を説明しているが、使用場面などには言及していない。さらに、「動作、作用が進行中であることを表す」という用法への比重の偏り、例えば、解説の部分において動作の継続を表す用法の例文が他の用法の例文の何倍も挙げられていることなども、学習者の習得に消極的な影響を与えていると考えられる。

総合篇第12課では、テイタ形の用法が取り上げられ、「テイル形の過去形であり、過去のある期間における動作や状態の持続を表す」とし、解説の部分では動作の継続を表す二つの例文が挙げられているだけである。つまり、説明内容に対して、学習者が学習し、練習する内容はすべて継続動詞に関わるもので、テイタ形が大過去や過去の習慣を表す用法には言及されていない。そのため、テイタ形が「過去における動作の継続」を表すという知識は身につけることができると考えられるが、過去の状態の継続、大過去や過去の習慣を表すテイタ形の用法については習得が難しくなるものと予想される。

以上、『新大学日本語』第一冊におけるテンスとアスペクトに関わるところを概観した。どの課においても、基本的で主要な用法については例文を示したり解説されたりしているが、十分であるとは言えない。第一冊が初級テキストであることから、説明等が不十分であっても不適当だとは言えないだろう。しかし、第二冊以降においても第一冊で言及されていなかった用法が説明されていないので、テキスト全体としては、テンス・アスペクトの習得という点から見れば、改善すべき点があると言える。

3　テンス・アスペクトに関する習得調査

3.1　調査の目的

調査の目的は、テンスとアスペクトについての習得状況を学習歴と関連付けながら明らかにすることである。日本語学習歴の異なる大連外国語大学の一年生、二年生、三年生を対象

に調査した。調査結果の分析をもとに、学習者にとって習得しやすいテンスとアスペクトの用法と習得しにくい用法ならびにその要因を明らかにする。また、調査結果の正誤の判断や比較分析のために、茨城大学の日本人学生対象の調査も実施した。

3.2　調査の概要

①アンケート調査

調査期間：2015 年 6 月 26 日～ 2015 年 7 月 3 日

調査対象：大連外国語大学日本語学院一年生、二年生、三年生各 50 名（合計 150 名）
茨城大学日本人大学生 24 名

調査方法：授業の担当教員と相談した上で、授業の時間を使い、調査票を配って、学生達に回答してもらった。調査に要した時間は、一年生約 25 分、二年生約 20 分、三年生約 20 分である。

調査項目：設問 A：選択式問題　　設問 B：穴埋め　　設問 C：文の翻訳

※個々の調査項目の調査文（以下の分析では「問題文」とする）については、一部は「3.3　調査の結果と分析」の分析で示す。それ以外の調査文については、本稿の末尾にまとめて示す。なお、日本人学生対象の調査においては、設問 C の翻訳を設問 B の形に変えて調査した。

②フォローアップ・インタビュー

調査期間：2015 年 9 月～ 2015 年 11 月

調査対象：アンケート調査の回答者

調査方法：電話と電子メールによって、個々の回答者に直接あるいは回答者でもある協力者を介して、どのように考えて具体的な回答に至ったかを質問した。

調査内容：誤答の理由についての質問

3.3　調査の結果と分析

3.3.1　設問 A の結果と分析

設問 A の結果をまとめたものが表 1 と図 1 である。なお、表中の①～④は、それぞれの問の選択肢に示した動詞の「①ル形、②タ形、③テイル形、④テイタ形」を表す。正答が複数ある場合は、それぞれの選択肢の回答数と割合（%）を表では示したが、図では合計した割合で示している。以下、設問 B、C の結果でも、正答が複数の場合は同様に示した。

表 1 では、50％以上の正答はゴシック体で、80％以上の正答はゴシック体の太字で示した。正答率の良し悪し、すなわち習得が進んでいると認められるかどうかについては、正答率 80％以上を判断基準として設定した。大連外国語大学の成績評価では、満点が 100 点の場合、80 点を「良好」の評価としており、その基準を本調査結果にも援用したからである。なお、テンス・アスペクトに関する基本的な知識は一年次終了までに勉強し終えているため、一年

生を含め、基準は80％のみに設定すべきであろう。しかし、日本語学習歴の長さもテンス・アスペクトの習得に影響すると考えられるので、日本語に接触する時間が短い一年生は、二年生・三年生と比べて学習した内容の定着が進んでいないのも当然のことだと考えられる。そこで、一年生については、一年の学習が終了する際に、正答率が50％以上になれば良好であろうと考えた。このような考えから、50％の基準も設定することにした。

図1を見ると、全体的には学年が上がるとともに正答率が高くなり、学習とその定着が進んでいることが分かる。しかし、A-5とA-7のように学年に関係なく習得があまり進んでいない項目もある。

A-1、A-2、A-3、A-4は一年生も正答率が高く、一年生より二年生が、二年生より三年生と正答率が高くなり、学習歴とともに学習が定着している様子が分かる。これに準じるのがA-6、A-8、A-10である。A-9はどの学年の回答も正答率はそれほど高くはないが、学年が上がるとともに高くなっており、学習の定着がやや遅いものの、順調に進んでいると言える。

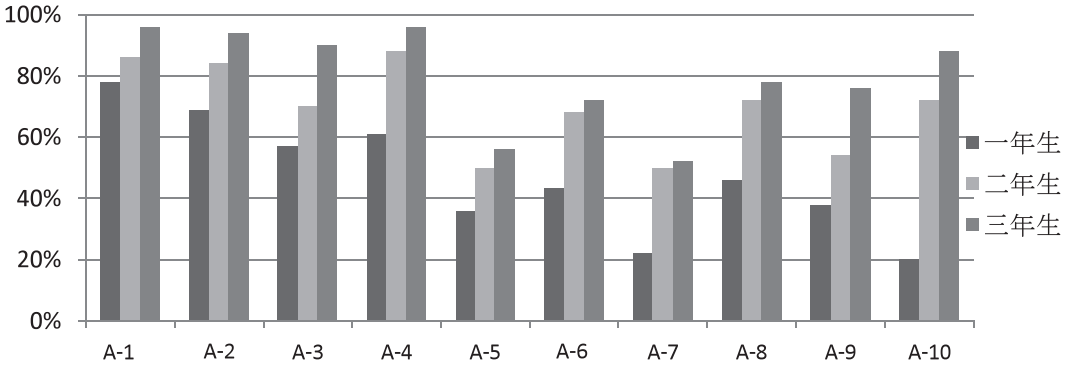
一方、A-5とA-7は学年間の正答率の伸びが顕著でなく、学年が上がっても習得があまり進んでいない。

次に正答率が低い項目のA-5とA-7、および複数の正答があり、かつそれぞれの正答率が高くないA-6について、調査文を示した上で、詳細に分析していく。

表1　設問Aの結果

設問番号　テンス・アスペクト形式と用法	一年生		二年生		三年生	
	正答	誤答	正答	誤答	正答	誤答
A-1　未来のル形、継続のテイル形	① 7 (14.29%) ③ 31 (63.27%)	11 (22.44%)	① 18 (36%) ③ 25 (50%)	7 (14%)	① 20 (40%) ③ 28 (56%)	2 (4%)
A-2　継続のテイル形	③ 31 (69.39%)	15 (30.61%)	③ 42 (84%)	8 (16%)	③ 47 (94%)	3 (6%)
A-3　ル形＋前に	① 28 (57.14%)	21 (42.86%)	① 35 (70%)	15 (30%)	① 45 (90%)	5 (10%)
A-4　過去状態のテイタ形	④ 30 (61.22%)	19 (38.78%)	④ 44 (88%)	6 (12%)	④ 48 (96%)	2 (4%)
A-5　現在実現のタ形	② 18 (36.73%)	31 (63.27%)	② 25 (50%)	25 (50%)	② 28 (56%)	22 (44%)
A-6　過去のタ形と大過去のテイタ形	② 12 (24.49%) ④ 9 (18.37%)	28 (57.14%)	② 27 (54%) ④ 7 (14%)	16 (32%)	② 28 (56%) ④ 8 (16%)	14 (28%)
A-7　考えの実現のタ形	② 11 (22.45%)	38 (77.55%)	② 25 (50%)	25 (50%)	② 26 (52%)	24 (48%)
A-8　現在状態のテイル形	③ 23 (46.94%)	26 (53.06%)	③ 36 (72%)	14 (28%)	③ 39 (78%)	11 (22%)
A-9　一般的な傾向のル形	① 19 (38.78%)	30 (61.22%)	① 27 (54%)	23 (46%)	① 38 (76%)	12 (24%)
A-10 テイル形の否定	③ 10 (20.41%)	39 (79.59%)	③ 36 (72%)	14 (28%)	③ 44 (88%)	6 (12%)

図１　設問Ａの正答率



A-5　祖父は一年ぶりに会った孫に「大きく＿②＿ね」と言った。

①なる　②なった　③なっている　④なっていた

この項目は、現在の実現を表すタ形の習得を確認する項目である。一年生の正答率は36.73％、二年生の正答率は50％、三年生の正答率も56％である。

日本語学習歴の長さにあまり関係なく、どの学年も正答率が低く、習得しにくい用法であると分かる。学習者がタ形を選ばなかった理由についてフォローアップ・インタビューで確認したところ、タ形の基本的な用法が過去を表すことであるからということであった。つまり、タ形が現在の実現をも表すことは学習者にとって考えにくい用法であると考えられる。回答者からの情報（フォローアップ・インタビューによる）では、「大きくなる」という事実に継続性があるため、タ形を選ばなかったということである。このようなことから、テイル形の「大きくなっている」を選んだ回答者がかなり多かったと考えられる。

A-6　今日こそ話そうと＿②④＿が、また今日も話さないで、帰ってきてしまった。

①思う　②思った　③思っている　④思っていた

この項目は、過去のタ形や大過去のテイタ形の習得を確認する項目である。正答率の合計は一年生では43.86％、二年生は68％、三年生は72％である。

三年生と二年生は一年生より正答率が高く、その差も小さくなかったが、三年生も基準の80％に達しなかった項目である。誤って①や③を選択した回答者からの情報によると、「話そう」の「そう」という表現は未来を表す場合が多いととらえたということである。例えば、回答者からは、「おいしそう」はまだ食べていない段階の発話で、「雨が降りそうだ」は雨がまだ降っていない時の発話であると、例を挙げて説明があった。[(3)] また、文全体からも、「話そう」という気持ちは過去においてだけではなく、今もそのような意志を持っていると考えたという回答者もいた。そのため、「今日」や「そう」という語を見て、単純に「過去のことではない」と考えた学習者が少なくなかったのである。

A-7　（バスが近づいてくる。それが待っていたバスだと分かった時）

「お母さん、バスが___②___よ。」

①来る　②来た　③来ている　④来ていた

この項目は、タ形が期待、あるいは過去の心象の実現を表すことを確認する項目である。一年生の正答率は22.45％、二年生の正答率は50％、三年生の正答率は52％である。

二年生と三年生でも正答率は約50％であり、全体的に正答率が低く、習得しにくい用法であると言える。過去の心象の実現を表すタ形であり、「バスが来たよ」は発話された段階では、まだ実現していない。ル形を選んだ回答者からの情報によれば、バスが近づいてくるが、まだ到着していないため、未実現を表すル形の「来る」を選んだということである。また、バスが近づいてきていて、発話時にはまだ進行中であるという考えから、テイル形の「来ている」を選んだ回答者も少なくない。学習者が基本的な用法にこだわって、それ以外の知識の習得が不十分になってしまったのだと考えられる。

3.3.2　設問Bの結果と分析

設問Bは、提示した動詞を適切な形にして穴埋めする設問である。その結果をまとめたものが表2と図2である。

表2では、文法的に誤りがなく、さらに文脈に合っている回答を○、つまり正答として取り扱った。一方、文法的には必ずしも誤りとは言えないが、日本語として不自然さがある回答は△とした。なお、日本語として文脈に合った自然な表現か不自然さがあるかについては、日本人対象の調査結果をもとに判断した。

図2を見ると、全体的には学年が上がるとともに正答率が高くなり、学習者の習得とその定着が進んでいることが分かる。

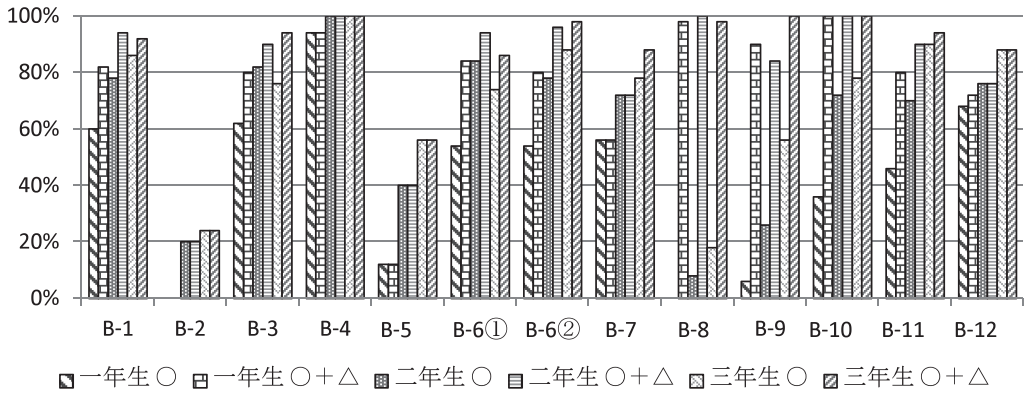
テンスの基本的な用法の習得を確認するB-4、B-6①、B-6②は、学年に関係なく正答率が高い。特にB-4の正答率は二年生と三年生は100％である。B-10も基礎知識を確認する項目であり、文全体における不自然さを考慮しなければ、すべての学年で100％であり、テンスの基礎知識の習得がかなり進んでいると言える。一方、B-2とB-8のように、どの学年の正答率も低く、学習の定着があまり進んでいない項目もある。また、B-5、B-9は学年が上がるとともに正答率が高くなってはいるが、三年生でも約50％であり、ほかの項目に比べて低く、習得の定着が遅いと言える。

次に正答率が低い項目のB-2、B-5、B-8、B-9について、回答を分類して示しつつ、詳細に分析していく。

表２　設問Ｂの結果

設問番号　テンス・アスペクト形式と用法	一年生			二年生			三年生		
	○	△	○＋△	○	△	○＋△	○	△	○＋△
B-1　態度のル形	30 (60%)	11 (22%)	41 (82%)	39 (78%)	8 (16%)	47 (94%)	43 (86%)	3 (6%)	46 (92%)
B-2　結果残存のテイタ形	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	10 (20%)	0 (0%)	10 (20%)	12 (24%)	0 (0%)	12 (24%)
B-3　職業のテイル形	31 (62%)	9 (18%)	40 (80%)	41 (82%)	4 (8%)	45 (90%)	38 (76%)	9 (18%)	47 (94%)
B-4　過去事実のタ形	47 (94%)	0 (0%)	47 (94%)	50 (100%)	0 (0%)	50 (100%)	50 (100%)	0 (0%)	50 (100%)
B-5　形容詞用法のル形	6 (12%)	0 (0%)	6 (12%)	20 (40%)	0 (0%)	20 (40%)	28 (56%)	0 (0%)	28 (56%)
B-6①　未来のル形	27 (54%)	15 (30%)	42 (84%)	42 (84%)	5 (10%)	47 (94%)	37 (74%)	6 (12%)	43 (86%)
B-6②　未来のル形	27 (54%)	13 (26%)	40 (80%)	39 (78%)	9 (18%)	48 (96%)	44 (88%)	5 (10%)	49 (98%)
B-7　現在状態のテイル形	28 (56%)	0 (0%)	28 (56%)	36 (72%)	0 (0%)	36 (72%)	39 (78%)	5 (10%)	44 (88%)
B-8　想起のタ形	0 (0%)	49 (98%)	49 (98%)	4 (8%)	46 (92%)	50 (100%)	9 (18%)	40 (80%)	49 (98%)
B-9　集団継続のテイル形	3 (6%)	42 (84%)	45 (90%)	13 (26%)	29 (58%)	42 (84%)	28 (56%)	22 (44%)	50 (100%)
B-10　現在状態のル形	18 (36%)	32 (64%)	50 (100%)	36 (72%)	14 (28%)	50 (100%)	39 (78%)	11 (22%)	50 (100%)
B-11　現在状態のタ形	23 (46%)	17 (34%)	40 (80%)	35 (70%)	10 (20%)	45 (90%)	45 (90%)	2 (4%)	47 (94%)
B-12　現在状態のテイル形	34 (68%)	2 (4%)	36 (72%)	38 (76%)	0 (0%)	38 (76%)	44 (88%)	0 (0%)	44 (88%)

図２　設問Ｂの正答率



B-2 「この時計、どこにありましたか。」

「教室に　落ちていました　(落ちる)。」

この項目は、出来事の結果の残存を表すテイタ形の習得を確認する項目である。一年生の正答率は0％、二年生の正答率は20％、三年生でも正答率は24％である。正答率が非常に低い項目であり、習得しにくく学習があまり定着していないと考えられる。

回答の分類：

正答：落ちていました　落ちていた

誤答：落ちる　落ちてしまう　落ちてしまいます

落ちた　落ちました　落ちりました　落ちてしまった　落ちてしまいました

落ちています　落ちっています

この項目では、「この時計、どこにありましたか？」という発話から、話題の時計はすでに拾われた状態であると分かる。従って、結果の残存も発話時以前、つまり過去の結果の残存を指すと考えることができる。動詞のテイタ形が過去の出来事の結果の残存を表すという用法も、過去のテンスにおける「テイル」の用法である。ところで、テイルの中心的な用法には「動作の継続」と「結果の状態」があるが、中国人学習者にとって後者の用法の方が前者よりも習得が困難であると考えられる。(4) これは中国語の表現と日本語の表現の違いが影響しているからだと考えられる。例えば、継続動詞が動作の継続を表す場合では、「食べている」に対応する中国語の表現は「(正) 在吃饭」であり、テイル形に対応する中国語の表現「(正) 在」がある。一方、瞬間動詞が結果の状態を表す場合では、「時計が落ちていた」に対応する中国語の表現は「表掉了」である。しかし、この「表掉了」という表現は過去の表現と結果の表現とを区別せず、「時計が落ちた」にも「時計が落ちている」にも対応する。どちらを表すかは文脈によって区別するのである。学習者は一年生の終了までに、過去のある期間における動作の持続を表す、またはある結果の状態を表すというテイタ形の用法を学習しても、「結果の状態」の用法については日本語に対応する中国語の表現が無い（表現の区別をしない）ために、習得が難しく不十分となってしまうと考えられる。そして、二年生と三年生になっても学習はあまり進まない。

ところで、「てしまう／てしまった」という誤答も少なくなかった。回答者からの情報によると、「時計が落ちた」ということについて残念な気持ちを表したかったので、「てしまう」や「てしまった」と回答したということである。

B-5 （写真の展覧会で）

「私はこの作品が一番　優れている　(優れる) と思いますよ。」

この項目は、形容詞用法のテイル形の習得を確認する項目である。一年生の正答率は12％、二年生の正答率は40％、三年生の正答率は56％である。

回答の分類：

正答：優れている

誤答：優れる　優れます 優れた　優れています　優れよう　優れて　優れって

この項目の正答率は学年が上がるとともに高くなってはいるものの、三年生でも60％に達しておらず、低いと言える。形容詞用法のテイル形の習得が進んでいないことが分かる。「優れる」は継続動詞でも瞬間動詞でもなく、形容詞のような物事の様子、性質、印象などを表す動詞であり、多くの場合、テイル形で使用される動詞である。

誤答について、回答者は母語の影響で「優れる」と回答したと考えられる。その理由は、中国語では「優れる」に対応する表現は形容詞の「好」「优秀」「棒」などであり、このような語はそのまま使用されるため、「優れる」もル形のままで使えると思って回答したと考えられる。また、問題文は作品の性質について述べていて、時間的な出来事を表すものではないということも、ル形を回答した理由であると考えられる。一方、タ形を回答した理由として、この作品は現在または未来に完成するものではなく、過去に完成したものであると考えたからだという回答者からの情報があった。

B-8　（現在の時間：午後１：50）

「あっ、今日２時から会議が＿＿あった＿＿（ある）。やばい、資料、まだ読んでない。」

この項目は、忘れていたことの想起を表すタ形の習得を確認する項目である。一年生の正答率は0％、二年生の正答率は8％、三年生の正答率でもわずか18％である。

回答の分類：

正答：あった　ありました

△：ある　あります

誤答：あるの　あっている

正答率が極めて低く、忘れていたことの想起を表すタ形の用法の習得が進んでいないことが分かる。回答は「ある」と「あります」のル形の表現に集中している。ル形の答えは文法的には完全な誤答とは言えないが、ル形の「ある」で表現すると時間的に余裕があるというニュアンスが生じる。従って、会議の開始が切迫した時点で思い出したという会話場面においては不自然な日本語表現になってしまう。

この項目の動詞のタ形は、過去に聞いたり考えたりしたこと、つまり過去に認識していたことを忘れていて、それを思い出した、ということを表す。この用法は「ある」「いる」のような状態述語に限られる。忘れていたことの想起を表すタ形の用法は基本的な用法ではなく、特殊な用法である。日本語学習者がよく、「未来のことなのに、どうして過去形を使うのか」と不思議に思う用法の一つである。回答者からの情報でも、まだ実現していない未来のことであるため、ル形を使用するのが当然であり、タ形を使用することは考えにくいということである。このようなテンス･アスペクトの特殊な用法は教科書では取り扱っていない。日本語能力、特に話し言葉の能力が高い学習者でなければ、正答を導くのは困難である。

B-9　最近、アフリカでは、毎年数万の人が食料不足のために＿＿死んでいる／死んでいます＿＿（死ぬ）。

この項目は、集団としての現象の継続を表すテイル形の習得を確認する項目である。一年生の正答率は6％、二年生の正答率は26％、三年生の正答率は56％である。正答率が高くない項目であるが、三年生は一年生と二年生と比べ、明らかに高くなっている。

回答の分類：

正答：死んでいる　死んでいます

△：死ぬ　死にます

死んだ　死にました　死んでしまいました

誤答：死んでしまいます　死ります

△の答えのル形とタ形も正答として取り扱うと、どの学年も80％を超えて、正答率が高い項目である。回答について、一般化の傾向に焦点を当てると、ル形も使える。発話時までの最近のことのみに注目して考えれば、タ形の表現も成り立つ。このように考えれば、ル形もタ形も誤りとは言えないが、集団としての現象の継続を表すテイル形を使用すると自然な日本語になる。日本人対象の調査結果でも、回答者全員がテイル形で回答しており、もっとも自然な表現であると言える。

ところで、このようなテイル形について、寺村（1984）は、動きや変化の主体が複数の場合、異なる個々の主体の動作や出来事はそれぞれ始まって終わるが、それらが連続して発生することから線と見なされると述べている。[(5)]「数万の人が死ぬ」ということは、ある時点から始まって、その結果が発話時までも繰り返し続いていると考えられる。つまり、テイル形が集団としての現象の継続を表すという用法も、テイル形の基本的な用法（継続を表すということ）に基づいたものである。

回答者からの情報によれば、「毎年数万の人が食料不足のために死ぬ」という事実は過去も現在も起こり、未来にも起こる時間とは関係ないもののため、ル形を回答したのだという。また、数万の人がすでに死んでいるためタ形を回答した、という回答者もいる。そして、「死ぬ」という動詞は瞬間動詞であるため、「死んでいる」という継続の意味を表すことはありえないと考えたということであった。

3.3.3 設問Cの結果と分析

設問Cの結果をまとめたものが表3と図3である。

表3と図3で示したように、設問Cの結果を全体的に見ると、正答率が高いと言える項目はC-1だけであり、一年生、二年生、三年生のすべてで90％近くになっている。項目C-2、C-3、C-4、C-5については、学年が上がるとともに正答率が高くなっているが、80％以上なのは三年生の項目C-4のみであり、必ずしも正答率が高い項目であるとは言えない。

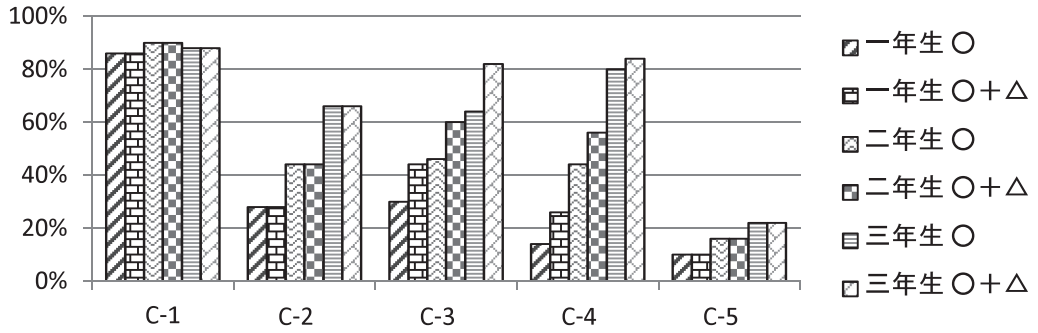
項目 C-2 と C-3 は、正答（○）のみに注目すると、一年生の正答率は 30％以下で、二年生の正答率は約 50％、三年生の正答率も 80％に達していない。項目 C-4 は、一年生と二年生の正答率は低いが、三年生になると正答率が 80％に達している。また、全体的に正答率が非常に低い項目は、C-5 であり、学習者全体において習得が進んでおらず、習得が難しいと考えられる。

次に正答率が低い項目 C-2、C-5 について詳細に分析していく。

表 3　設問 C の結果

設問番号　テンス・アスペクト形式と用法	一年生			二年生			三年生		
	○	△	○+△	○	△	○+△	○	△	○+△
C-1　真理のル形	43 (86%)	0（ 0%）	43（86%）	45 (90%)	0（ 0%）	45（90%）	44 (88%)	0（ 0%）	44（88%）
C-2　過去習慣のタ形	14（28%）	0（ 0%）	14（28%）	22（44%）	0（ 0%）	22（44%）	33 (66%)	0（ 0%）	33（66%）
C-3　結果残存のタ形	15（30%）	7（14%）	22（44%）	23（46%）	7（14%）	30（60%）	32 (64%)	9（18%）	41（82%）
C-4　形容詞用法のテイル形	7（14%）	6（12%）	13（26%）	22（44%）	6（12%）	28（56%）	40 (80%)	2（ 4%）	42（84%）
C-5　ル形＋前に	5（10%）	0（ 0%）	5（10%）	8（16%）	0（ 0%）	8（16%）	11（22%）	0（ 0%）	11（22%）

図 3　設問 C の正答率



C-2　小时候，每到夏天我就去爷爷家玩儿。

子供の時、夏になると祖父の家に遊びに　行った（行きました）／行っていた（行っていました）（遊びに行く）。

この項目は、過去の習慣を表すタ形（テイタ形）の習得を確認する項目である。一年生の正答率は 28％、二年生の正答率は 44％、三年生の正答率は 66％である。

回答の分類：

正答：遊びに行った　遊びに行きました
　　遊びに行っていた　遊びに行っていました
誤答：遊びに行く　遊びに行きます
　　遊びに行っています

三年生でも正答率は80％に達しておらず、正答率はあまり高くない。習慣を表す用法として、ル形とテイル形が現在の習慣を表し、タ形とテイタ形は過去の習慣を表す。テイル形が現在の習慣を表す場合、その習慣は発話時以前のある時に始まって、それが発話時に終わらずに続いていることを表す。一方、ル形が現在の習慣を表す時、「以前のある時に始まった」という意識もなく、また「いずれそのうち終わる」という意識もない、ただあることが規則的に繰り返し行われることを表す。[(6)] タ形が過去の習慣を表す用法はル形の用法に対応し、テイタ形はテイル形の用法に対応している。この項目は過去の習慣を述べているものであるので、タ形･テイタ形を回答する学習者がほとんどだろうと考えたが、結果から見ると、推測とは異なって正答率が低く、その習得が進んでいないと分かった。

回答者の誤答は動詞のル形に集中している。回答者からの情報では、中国語文の「小时候，毎到夏天我就去爷爷家玩儿。」において、動詞の「玩儿」に過去を表す「了」が付いていないため、中国語文通りに翻訳し、ル形を回答したということである。また、「毎到」という表現があるので、「夏になる」という出来事が起こると、いつも「遊びに行く」という動作が行われるという事実を述べるという考えから、ル形を回答したということである。このように、ル形の回答には母語の影響が認められる。テイル形を回答した理由については、毎年の夏に同じことをするため、毎年繰り返される出来事を連続することとして捉えたからだということである。なお、正答について、問題文は習慣を表すものであるとは捉えず、ただ過去のことであるためタ形を回答したという学習者もいる。

C-5　祖父在我出生之前那年就去世了。
　　祖父は私が＿生まれる前の年に＿（生まれる）なくなりました。

この項目は複文の時間の前後関係の習得を確認する項目である。一年生の正答率は10％、二年生の正答率は16％、三年生でも正答率は22％である。

回答の分類：
正答：生まれる
誤答：生まれた
　　生まれている
　　生まれてから　生まれ

この項目は日本語学習歴と関係なく、どの学年でも正答率が極めて低い。複文において、主節のテンスは絶対テンスであるが、従属節のテンスは相対テンスである。主節のテンスと従属節のテンスが異なる場合、従属節の「私が生まれる」のテンスは主節の「祖父がなくなっ

た」の時点との時間的前後関係で決まる。「私が生まれる」ということは過去の出来事であるが、「祖父がなくなった」ということと比べ、発生した時間が遅いため、ここではル形を使用すべきである。

項目 A-3 も複文の時間の前後関係の習得を確認する項目であるが、その正答率は項目 C-5 と比べ非常に高かった。回答者からの情報では、項目 A-3 の「日本に来る」ということはどんなテンスの形式も持つ可能性があるが、項目 C-5 の「私が生まれる」という事実はどう考えても過去のことであるので、ル形を用いることは考えにくいということである。

3.3.4　日本人調査の結果

中国人日本語学習者の日本語のテンスやアスペクトの習得状況と比較することを目的として、日本人のテンス・アスペクトの使用状況についても調査した。日本人向けの調査であるので、設問 C の翻訳を設問 B の形のように変えた。その結果を簡単に示すと、以下のとおりである。（結果の詳細については、紙幅の都合から省略する。）

設問 A の正答率については、A-1 から A-10 はすべて 100％である。設問 B については、想起のタ形を確認する B-8 の正答率は 87.50％（○：87.50％、△：12.50％）、「ル形＋前に」を確認する B-17（中国人向けの調査の C-5 に対応する）の正答率は 95.83％（○:95.83％、△:4.17％）であり、それ以外の項目の正答率は 100％である。

4　総合的分析と考察

本節では、教科書分析と調査の結果についての総合的分析と考察を述べる。

教科書『新大学日本語』では、第一冊の終わりまでにル形、タ形、テイル形、テイタ形の説明が終了している。つまり、学習者は一年次後期の最初の一ヶ月までのかなり早い段階でテンスとアスペクトを学習し終える。そのテンスとアスペクトの内容は非常に基本的なものであり、それを学習しないと、その後の日本語学習にも支障が出てくる。したがって、早い段階で取り扱うというのは適切であるし、その後の日本語学習に役立つ。しかしながら、そこには問題もある。初級レベルの学習者にとって、半年程度の学習で、基本的な内容と言えるテンスとアスペクトをきちんと把握し、運用することは難しい。そのため、日本語とまったく異なる文法構造の中国語を母語とする学習者にとって、すでに学習した内容でも、すべてを正確に使用できないのは当然である。調査結果を見ると、一年生の正答率が 50％以上のものは全 27 項目の中の 11 項目であり、正答率が高い項目は多くない。

教科書のテンスとアスペクトの各項目についての説明にも不十分な点がある。取り上げている文法項目でも、その説明が非常に簡単である場合がある。確かに外国人向けの教科書であり、初級の段階では、簡単な説明である必要があるが、様々な用法がある文法項目や使い分けが難しい項目では、段階的に詳細な説明が加えられることが、日本語学習をする上で

は、より役立つであろうと考えられる。また、教科書では、テンスとアスペクトの基本的な内容を説明しているが、その特殊な用法についてはあまり言及していない。そのことは基本的な内容を確認する項目の正答率は高かったが、特殊な用法を確認する項目の正答率は低かったという調査結果に対応している。

調査結果を見ると、全調査項目27のうち、22項目（約80％）は学年が上がるとともに正答率が高くなっている。つまり、全体的に見ると、学年が上がるとともにテンスとアスペクトの習得が進んでいると言える。27項目のうち、三年生の正答率が80％を超えるのは12項目（約45％）である。15項目（約55％）は、三年生でも基準とした80％に達しておらず、それらは習得しにくい用法であると言える。なお、このうち、2項目は、二年生の正答率は80％であったが、三年生の正答率はそれより少し低かった。

正答率が低かった個別項目は、現在の実現を表すタ形を確認する項目（A-5）、過去のタ形と大過去のテイタ形を確認する項目（A-6）、期待や過去の心象の実現を表すタ形を確認する項目（A-7）、出来事の結果の残存を表すテイタ形を確認する項目（B-2）、形容詞用法のテイル形を確認する項目（B-5）、忘れていたことの想起を表すタ形を確認する項目（B-8）、集団としての現象の継続を表すテイル形を確認する項目（B-9）、過去の習慣を表すタ形とテイタ形の習得を確認する項目（C-2）、複文の時間の前後関係を確認する項目（C-5）である。このうち、学習歴と関係なく、どの学年でも正答率が非常に低かった項目は、項目B-2、B-8、C-5である。この三つの項目は特に習得しにくい用法と言える。

教科書では、ル形についてはテンスに関する内容を特に説明していないが、他の文法項目と比べ、その習得は進んでいる。無標の文法形式のル形はテンスの基本であるが、学習者がテンスとアスペクトの概念に触れ始めるのは、第6課のタ形を学習する時である。それ以降、他の有標の文法項目を学習しながら、それらとの比較としてル形の用法も自然に身につき、その用法の習得が進んでいったと考えられる。ル形が正答である項目で、正答率が低かった項目はA-9（一般的な傾向のル形）のみであるが、この項目においても三年生の正答率は76％であった。

タ形については、現在の実現を表すこと（A-5）、期待や過去の心象の実現を表すこと（A-7）、忘れていたことの想起を表すこと（B-8）、過去の習慣を表すこと（C-2）が学習者にとって習得しにくいことが分かった。現在の実現を表すこと、期待や過去の心象の実現を表すことや、忘れていたことの想起を表すことはタ形の特殊な用法であり、タ形でありながらすべて現在の出来事を表す用法である。教科書では、その三つの項目については例文も取り上げられていないし、説明もない。回答の際、学習者は基本的な用法で考えたり、母語の表現にしたがって回答したりして、誤ってしまったと考えられる。また、過去の習慣を表すことを確認する項目（C-2）では、問題文が中国語文であったために、母語の表現の仕方の影響で誤回答してしまったと考えられる。

テイル形について、設問A、B、Cを合わせて8項目を設定した。このうち、形容詞用法（B-5）

と集団としての現象の継続を表す用法（B-9）ではテイル形の回答が少なく、習得しにくい用法であると考えられる。形容詞用法について、教科書では「この道が曲がっています。」と「テレビ塔がそびえています。」という二つの例を挙げ、「テイル形は単純な状態を表す」と説明している。これに関する練習問題はない。形容詞用法についてはC-4でも設問しているが、C-4の「似ている」は日常の会話の中でも出やすい表現であり、正答率は比較的高かった。一方、前節で述べたB-5の「優れている」は、評価や判断を表すものであり、同じ形容詞用法であっても、教科書の例文のように目で見てわかる単なる状態を表すものではない。そのため、教科書の形容詞用法の「テイル形は単純な状態を表す」という説明は、形容詞用法全体の説明としては十分とは言えない。この教科書の簡単な説明が、形容詞用法の習得を難しくさせている一因だと考えられる。集団としての現象の継続を表す用法については、教科書では、項目B-9の問題文と類似している例文「戦争で毎日多くの人が死んでいます」を挙げ、「動作の反復進行を表す」という言い方で説明されている。しかし、説明はこれだけにとどまっており、練習の部分でも単なる動作の継続を表す用法を中心としたものであり、動作の反復進行を表す用法の練習もないため、集団としての現象の継続を表す用法の習得は難しいと考えられる。

テイタ形はA-4、A-6、B-2という三項目であるが、大過去を表すこと（A-6）と出来事の結果の残存を表すこと（B-2）が習得しにくいことが分かった。項目A-6についても、「思った」と「思っていた」という二つの選択肢を正答としたが、テイタ形を選択した回答者は少なく、大過去を表すテイタ形は習得しくいと言える。なお、同じ設問についての日本人の回答は、「思った」と「思っていた」の両方を選択した人が圧倒的に多く、「思っていた」は全員が選択していた。つまり、この項目では、テイタ形が最も自然な日本語表現であると言える。テイタ形の用法については、そもそも教科書でもあまり詳細に説明されておらず、筆者自身を含めた学習者としても、タ形とテイル形両方の結合としてのテイタ形については使いにくいという意識がある。このようなことから、テイタ形の使用に慣れておらず、その用法の習得があまり進んでいないと考えられる。日本語学習者にとって、テイタ形そのものが難しいものなのだと言える。

以上のように、調査結果において正答率が低かった項目を見てみると、母語である中国語の影響と考えられる誤答もあるが、教科書での取り上げ方との相関が見られるものが多い。正答率が低く、教科書で取り上げられていない用法として、現在の実現を表すタ形、期待や過去の心象の実現を表すタ形、忘れていたことの想起を表すタ形、現在の所属や職業を表すテイル形、過去の習慣を表すタ形とテイタ形、大過去のテイタ形がある。また、教科書で取り上げられているが、その説明が不十分である用法として、現在の状態を表すテイル形、形容詞用法のテイル形、集団としての現象の継続を表すテイル形、出来事の結果の残存を表すテイタ形を指摘することができる。このように、教科書での取り上げ方が学習者の習得にマイナスに働く大きな要因となっていることが分かった。

5　まとめ

本研究では、現在中国の大連外国語大学で使用されている教科書『新大学日本語』におけるテンスとアスペクトに関わる内容分析と、同大学において実施したテンスとアスペクトに関する習得調査の結果分析、さらに、両者の関連性を中心に考察した。

教科書では、第一冊においてテンスとアスペクトの内容が取り扱われている。各文法項目については、形式とともに簡単に説明され、学習者は早い段階でそれらの基本的な用法を学習している。このことはその後の日本語学習に役立つと考えられる。調査結果においても、基本的な用法を確認する調査項目の正答率は高く、その習得が進んでいると言える。一方、学習者にとって正答率が低く使い分けが困難なテンス・アスペクトの用法は、基本的でない特殊な用法であった。それらについては、教科書の説明が不十分であったり、説明そのものがなかったりであった。このような用法に関する調査項目では、正答率が低く、その習得が進んでないことが分かった。

以上、日本語学習者にとって、教科書の役割が極めて重要であると確認できた。教科書において、どのように取り上げているか、またその内容をどのように説明しているか、練習問題がどのように設けられているかが、学習者の習得に強く影響していると分かった。したがって、習得が困難な項目については、その学習に役立つ教材を開発することが効果的な対応策であると考えられる。テンスとアスペクトのように様々な用法を持つ文法項目では、その特殊な用法をすべて教科書に盛り込むことは現実的ではない。したがって、自学用の教材の開発が現実的な改善方法であると考えられる。

ところで、学習者は基本的には教科書で日本語を学習しているが、教科書以外の様々な学習機会も日本語の習得に影響している。例えば、大連外国語大学では二年生と三年生はそれぞれ日本語能力試験N2とN1を受験し、その準備のために教科書以外の教材も使用して学習する。教科書において取り上げられていない内容であっても、他の教材で習得できるという場合もある。また、教師の教授方法も学習者の習得に対して大きな影響を与えている可能性がある。[7] 本研究では教科書分析と習得調査結果を中心に分析と考察を行ってきたが、学習者の習得に影響する可能性のある様々な要素を考慮した研究については十分に行えていない。また、大連外国語大学以外の大学でも同様のことが言えるのかは分からない。これらについては、今後の課題として研究に取り組みたい。

注

(1) 木村（1982）p.19による。

(2)『新大学日本語』では、文法の解説は中国語であるが、本研究では筆者が日本語訳した解説を用いる。

(3)「話そう」の「そう」は「話す」という語の意志形であり、「美味しそう」の「そう」は様態の「そう」である。この二つの「そう」は別のものであるが、学習者は同じものと誤解してしまっていると考えられる。

(4) 菅谷（2004）によれば、文法テスト形式でテイル形の習得を調査した結果、得点の低いグループでは母語（ドイツ語、ロシア語、

ブルガリア語）に関わらず「動作の持続」の得点のほうが「結果の状態」の得点より高いこと、得点の高いグループ（母語は英語）では、「アスペクトの習得が進んでも，「結果の状態」にタを選ぶか，テイルを選ぶか，学習者は混乱している様子がうかがえる」（菅谷 2004：61）とある。「結果の状態」の方が習得が困難である点は、本研究で対象とした中国語母語話者の場合と共通している。

(5) 寺村（1984）pp.130-131 による。

(6) 寺村（1984）p.129 による。

(7) 菅谷（2004：62）でも、テイル形の「動作の持続」から「結果の状態」という習得パターンについて、自然習得の有無や導入順序が習得に強く影響している可能性を指摘している。

参考文献

庵功雄（2012）「§11　時間を表す表現（1）ーテンスー」「§12　時間を表す表現（2）ーアスペクト」『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク，pp.142-167

木村英樹（1982）「テンス・アスペクト：中国語」『講座日本語学 11　外国語との対照Ⅱ』明治書院，pp.19-39

金田一春彦編（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房

国際交流基金（2013）『海外の日本語教育の現状　2012 年度日本語教育機関調査より』くろしお出版

蔡全胜・劉晓華（2007）『新大学日本語　第一冊』大連理工大学出版社

菅谷奈津恵（2004）「文法テストによる日本語学習者のアスペクト習得研究ー L1 の役割の検討ー」『日本語教育』123，pp.56-65

砂川有里子（1990）『日本語文法セルフ・マスターシリーズ 2　する・した・している』くろしお出版

寺村秀夫（1984）「第五章　確言の文」『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版，pp.75-216

寺村秀夫（2011）『外国人学習者の日本語誤用例集』（大阪大学、1990 年）国立国語研究所

細川英雄（1990）「『金沢大学外国人留学生の日本語作文』における誤用とその種類」『金沢大学外国人留学生の日本語作文：分析編』金沢大学教養部日本語・日本事情研究室，pp.178-187

益岡隆志・田窪行則（1992）「第Ⅲ部　5 章　テンスとアスペクト」『基礎日本語文法ー改訂版ー』くろしお出版，pp.108-116

楊永娟（2010）「中日動詞時制表現についての対照研究」『一橋大学国際教育センター紀要』1，pp.3-15

調査文一覧（3．3 の分析で示した項目を除く）　＊下線部は正答

設問 A　(A-5、6、7 を除く)

A-1　留学の思い出はいつまでも心の中に<u>残る／残っている</u>と思う。

A-2　（二人とも部屋の中にいる）
「雨はまだ<u>降っている</u>?」
「ううん、もう止んだよ。」

A-3　日本に<u>来る</u>前に、日本文化に関する本をたくさん読みました。

A-4　部屋に入った時、子どもが<u>泣いていた</u>。

A-8　「ほら、見て。向こうに富士山が見える。」
「ああ。きれいな形を<u>している</u>ねえ。」

A-9　誰でも年をとれば忘れっぽく<u>なる</u>。

A-10　「そろそろ出発します。全員集まりましたか。」
「いいえ。花子さんがまだ<u>来ていません</u>。」

設問 B　(B-2、5、8、9 を除く)

B-1　（会議中）
「私は田中さんの意見を<u>支持します</u>(支持する)。」

B-3　（初対面同士の会話）
「お仕事は何ですか」
「東京の銀行に<u>勤めています</u>(勤める)。」

B-4　昨日、空港で AKB48 の大島優子に<u>会った／会いました</u>(会う)。

B-6　「もしもし、田中さんはいますか。」
「あの、いま外出中です。でも 3 時までには<u>① 帰ります</u>(帰る)。」
「そうですか。ではそのころもう一度<u>② お電話します</u>(お電話する)。」

B-7　（図書館の受付で）
「学生証を<u>持っています</u>(持つ) か 。」
「あっ、今日は忘れてきてしまいました。」

B-10　「ね、見て、あそこに珍しい鳥が<u>いる</u>(いる) よ。」

B-11　「ああ、のどが<u>かわいた</u>(かわく)！　なにか飲むものない？」

B-12　「あの時計、だいぶ<u>遅れています</u>(遅れる) ね。」「あれはもう動いていません。」

設問 C　(C-2 を除く)

C-1　太阳总是从东边升起。
太陽は<u>いつも東から昇る</u>(昇る)。

C-3　现在我的英语比 3 年前好了，可是还是读不了小说。
<u>今、私の英語は 3 年前より上手になった／なっている</u>(なる) が、まだ小説が読めない。

C-4　这个孩子的眼睛和他爸爸很像呢。
この子は目が<u>お父さんに　似ているね／似ていますね</u>(似る)。